

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	たけうち りお 竹内 里欧	所属・職名 Jyväskylä University, Postdoctoral student
e-mail		
発表題名 (英語)	“The Creation of Japanese via the West: the Discussion on <i>Inaka Shinshi</i> (country gentleman) by Tokutomi Soho”	
著者名	Rio Takeuchi	
会議名 (英語)	East – West (Re) Negotiations: Popular Culture as a Means of Collective Memory	
開催地(国、市)	at Tampere University, Finland	
参加期間	2009年 12月 10日	
<p>報告者は、2009年12月10日、フィンランドのタンペレ大学において開催された「East – West (Re) Negotiations: Popular Culture as a Means of Collective Memory」に参加し、発表を行った。報告者は、12月10日に行われた「Panel 1」において、自身の研究(上記テーマ)について発表を行った。「Panel 1」の発表者は3名で、報告者と、Maarit Piipponen (Tampere University、発表タイトル“Romancing and Regenerating Whiteness: White Masculinity between Two “Easts” in Earl Derr Biggers’ <i>The House without a key</i>”)と Mervi Miettinen (University of Tampere、発表タイトル““Whatever Happened to the American Dream?”–The Superhero as the Ultimate American Patriot”)。Chair は、Dmitry Strovsky (Ural State University)。</p> <p>&lt;発表内容など&gt;</p> <p>本発表では、主に明治20年代に雑誌「国民之友」を中心に展開された徳富蘇峰の思想について検討を行った。蘇峰が論壇に登場し活発に活動を開始した明治20年代頃とは、『三酔人経綸問答』の刊行、民友社・政教社の設立などにも象徴されるように、近代日本社会が、西洋や東アジアとの関係において、どのような新しい公共圏を築いていくか、というテーマについての思想形成において、非常に重要かつ起源的な時代とみなされている。蘇峰は、そういった時代を代表する重要なオピニオンリーダーとして活発に言論活動を行い、西洋や東アジアとの関係において近代日本社会はどのような公共圏を築いていくべきか、ということについて、様々な影響力ある発言を行った。</p> <p>発表では、特に、蘇峰の「田舎紳士」論に着目し、イギリスのカントリー・ジェントルマン理想や、Thomas Babington Macaulay, Herbert Spencer, Richard Cobden, John Bright などの思想の影響のもとに、蘇峰がいかにして「田舎紳士」という、ナショナリズムの担い手たる人間像を造形したかについて検討した。特に、蘇峰の「田舎紳士」論においては、イギリスという(当時の)先進文明の理想像に「媒介」されて、日本のナショナリズムの担い手が構築されているという特徴があることに注意を喚起した。即ち、蘇峰の「田舎紳士」論においては、先進文明との接触により喚起された「ルサンチマン」がナショナリズムを強化するという Liah Greenfeld などの議</p>		

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

論とは異なり、「先進文明」である「西洋文明」への感情が、ナショナリズムを正当化し補強する「根拠」として利用されているのである。発表では、そのような「西洋」表象の利用の様相について、さらに議論を行った。発表原稿は、約 7519words。

<質疑応答等>

司会者および会場の参加者より行われた質疑応答では、蘇峰の議論の時系列的变化について、また、「田舎紳士」という表象を捻出した背景について質問された。本学会では、「西洋」表象にかんする研究を行っている様々な地域の研究者が多数参加し、活発に議論を行っており、報告者の研究テーマにとって、非常に有意義であった。

